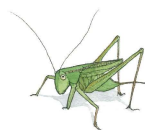


大阪大学のグローバル連携



海外交流

河原源太*

Global Engagement at Osaka University

Key Words : Global Engagement, International Affairs, International Cooperation

1. はじめに

昨年(2017年)8月26日より大阪大学のグローバル連携を担当しております理事・副学長の河原源太と申します。私はこれまで、大阪大学において全学あるいは部局の国際交流に携わった経験があり、それを契機に本学のグローバル連携を担当することになりました。全学的な国際交流については、鷺田清一総長の時代に当時国際交流担当理事・副学長であられた辻毅一郎先生の下、本学への留学生の短期受入プログラムの運営あるいは安全保障輸出管理の視点も取り入れた国際連携体制の整備等を担当させて頂きました。また、同時期に大学院基礎工学研究科・基礎工学部においても、当時研究科長・学部長であられた戸部義人先生の下で、大学院生の海外派遣プログラムの開発や運営あるいは基礎工学国際コンソーシアムの創設に関わる機会を得ました。

このようにかつて私が全学や部局の国際交流に関わっていました時期に比べますと、最近では自由貿易圏の拡大やインターネットの普及を背景としてグローバル化が一段と急激に進行し、他方ではエネルギー問題、環境問題、食糧問題をはじめとする地球規模での深刻な諸課題に人類は直面しており、大学の国際交流やグローバル連携の枠組みや使命が大きく様変わりしているように感じています。はたして、このような状況において大学が担うグローバル連携

の意義とは何でしょうか？

2. 大学におけるグローバル連携の意義

急激にグローバル化が進行する世界では、各国が厳しい競争にさらされており、我々が所属するアカデミア、つまり大学ですら、決して例外ではありません。世界大学ランキングがそれを象徴しています。これは私見ですが、グローバル化の究極の行く末は競争力に劣る弱者の淘汰だと思われまます。このようなグローバル化が進行する世界では、現在いくつかの国で国家、民族、宗教、階級の様々なレベルでグローバル化に抗する動きが見られます。例えば、イギリスにおける欧州連合脱退の決議やアメリカにおけるドナルド・トランプ大統領の出現はそれを象徴する出来事だと言えるでしょう。

このようにグローバル化とその反動との間で揺れ動く混沌とした世界や社会において、大学が担う国際交流やグローバル連携を通じた社会貢献は今後益々重要になるものと考えます。いくら厳しい競争状態にある社会にあっても、大学が本来担うべき学術、文化、芸術、医療といった活動は、競争を超越した存在だと信じます。大学を(種子)植物に例えて言うならば、その価値は、競い合いの指標や対象になる果実、すなわち植物がもたらす結果あるいは機能と言うよりはむしろ、それを生み出す元となる美しい花の方にあると思います。先に述べましたように、不安定な状況にある世界の現状に鑑み、このように競争を超越した存在であるべき大学が、人類の福祉と世界平和のための強固な国際ネットワークを形成し、それらを国際社会のハブとして、世界協調の推進あるいはその維持を担わねばならないと考えます。



* Genta KAWAHARA

1963年4月生まれ
大阪大学基礎工学部卒業(1987年)
現在、大阪大学 理事・副学長
博士(工学) 熱流体工学
TEL: 06-6879-4061
FAX: 06-6879-4068
E-mail: kawahara@me.es.osaka-u.ac.jp

3. 大阪大学の目指すグローバル連携

大阪大学の基本理念が掲げられた大阪大学憲章で

は、社会への貢献の項目において、『大阪大学は、教育研究活動を通じて、「地域に生き世界に伸びる」をモットーとして、社会の安寧と福祉、世界平和、人類と自然環境の調和に貢献する。』と記されています。また、この基本理念を第3期中期目標期間において具現化することを目指して提示されたOUビジョン2021では、オープン・コミュニティの実現、すなわち競争 (competition) ではなく、共創 (co-creation)、つまり地域社会やグローバル社会と大学が連携してイノベーションを創出し、社会が抱える諸課題を解決し、ひいては社会の心豊かな発展へ貢献することの重要性が記されています。大阪大学では、現在、以上の理念の実現を目指して、大学の各部局あるいは大学本部が様々なグローバル連携事業を推進しています。その中でも大学本部が特に力を入れている事業が、「グローバル・ナレッジ・パートナー」との組織間連携と「大阪大学ASEANキャンパス」における教育研究活動です。

大阪大学は、研究型総合大学として、学術、文化、芸術、医療等のあらゆる面において、社会が抱える種々の課題の解決や社会の持続可能な発展への貢献に向けて、世界の有力大学との学術交流のさらなる活性化を図っています。現在、本学は大学間協定を120件余り、部局間協定は600件近く、世界各国の大学等と連携しています。こうした実績をより強固な国際連携関係に発展させ、組織対組織のより実質的かつ包括的な連携事業を展開するグローバル・ナレッジ・パートナー大学を設定しています。パートナー大学との組織間連携により、世界最先端の卓越した研究拠点を形成し、そこで生み出される先進的な学術研究の成果を用いて、人類が抱える社会的な諸課題の解決に取り組みます。大阪大学の欧州拠点があるオランダのグローニンゲン大学とは、これまでの活発な学術交流をさらに発展させるとともに、新たにデータ科学に関する学際的な国際共同研究を展開することを計画しています。本年(2018年)3月にはグローニンゲン大学との合意に基づき、大阪大学内に同大学のオフィスも設置しました。大阪大学東アジア拠点がある中国上海市に位置し、20年以上にわたって学術交流を深めてきた上海交通大学とは、昨年(2017年)にダブル・ディグリー・プログラムを開設して組織的な教育研究を展開しています。また、社会的課題を意識した新分野での先端国際共同

研究として、スマート・シティに関する研究連携を開始しました。大阪大学の北米拠点があるアメリカのカリフォルニア大学とは、同大学のオフィスを本学に招致し、カリフォルニア大学教員による本学での集中講義の開講やカリフォルニア大学学生に対する本学での短期プログラムの実施等、人類の課題解決を担う人材育成事業を組織的に展開しています。さらには、昨年(2017年)10月に来学されたユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)のマイケル・アサー学長と本学西尾章治郎総長との間で組織的な大学間連携について協議がなされ、社会的課題を意識したUCLの研究目標であるGrand Challengesと本学のOUビジョン2021との理念の共通性が確認され、今後免疫学をはじめとする様々な分野で、社会的課題の解決を目指した国際共同研究を実施することで合意しました。

一方で、ASEAN地域において、タイ、ベトナム、ブルネイ、インドネシアをネットワークでつなぐ大阪大学ASEANキャンパスの設置も推進しています。このキャンパスは、本学とASEAN諸国との間でこれまで培ってきた国際共同研究実績を基盤に、現地で大阪大学の教育研究を実施し、ASEAN地域が抱える課題の解決に資する研究の展開と人材の育成を行うためのものです。この構想では、ASEAN諸国における3Q、つまりQuality of Life, Quality of Nature, Quality of Technologyを基本にした質の高い成長を支援するとともに、国際的な産官学民共創という新機軸により3Qの社会実装のための基盤を整備し、国際連合が掲げる持続可能な開発目標(SDGs)の達成にも貢献していきたいと考えています。具体的な教育研究プログラムとしては、大阪大学ASEAN拠点があるタイのマヒドン大学、ベトナムのベトナム科学技術アカデミー、ブルネイのブルネイ・ダルサラーム大学、インドネシアのバンドン工科大学等との組織間連携により、バイオ・テクノロジー、バイオ・ダイバーシティ、ハラールサイエンス、日本語・日本文化等の分野において現地で国際共同学位プログラムを提供していく予定です。既に、ベトナム、タイ、ブルネイにおいてはキャンパス開設に伴い昨年(2017年)及び本年(2018年)に式典や調印式を行いました。

4. おわりに

本稿では大阪大学がグローバル連携を考える上で前提となる世界の状況を概観し、大阪大学が担うべきグローバル連携について述べました。本学は、大阪大学憲章、OUビジョン2021の理念実現に向け、グローバル・ナレッジ・パートナーや大阪大学ASEAN キャンパスと言ったグローバル連携事業を

通じて、世界平和の維持に貢献すると同時に、グローバル連携により推進した教育研究の成果を社会的な課題の解決に役立てることも視野に入れて活動を展開しています。

本稿がきっかけとなり、大阪大学のグローバル連携に関して一人でも多くの読者の皆様のご理解とご支援が得られましたら幸甚です。

